



ハイレイト祈禱課題 2026年10月号

1. イスラエルの存在を否定する動きを覚えて

ホロコーストの悲劇から3年後の1948年、近代イスラエルが建国されました。世界で唯一、ユダヤ人がユダヤ人らしく生きられる国、それがイスラエルです。建国以来、国家の存在そのものを否定する勢力との戦いに苦しめられてきました。しかし、その戦いは武力によるものだけではありません。

「From the river to the sea (川から海まで)」というスローガンが反イスラエルデモでよく使われます。「川」はヨルダン川、「海」は地中海。その間の土地をパレスチナであると主張し、イスラエルの存在を否定する意味で用いられてきました。

このスローガンは、2023年10月7日のハマスによる大規模テロの翌日には、一層激しく世界各地で叫ばれるようになりました。この時イスラエルは、約1200人が殺害され、251人が人質としてガザに連れ去られるという、建国以来最悪の悲劇のただ中にありました。にもかかわらず、「イスラエルが悪い。パレスチナを解放せよ」と責め立てる声が広がっていったのです。

もう一つ、繰り返されているのが、「ジェノサイド国家」という批判です。イスラエルがガザでジェノサイドを行っているというものです。しかし、ハマスが病院や学校などの民間施設を軍事利用し、ガザ市民を「人間の盾」としてきたこと、支援物資を強奪していたこと、一方で、イスラエルは犠牲者を最小限にするためにさまざまな努力をしたことなどはあまり報道されていません。こうして事実が覆い隠される中で、非難の矛先はイスラエルへと向けられています。

そもそも「ジェノサイド」とは、民族などの集団を意図的に破壊するという意味です。この言葉を生み出したのは、ユダヤ系ポーランド人の法律家レムキンでした。それまで、ホロコーストのよ

うな、組織的な大量殺害を表す言葉がありませんでした。それでレムキンは、ギリシャ語の「民族」とラテン語の「殺す」を組み合わせ、「ジェノサイド」という言葉をつくったのです。その言葉が今、ユダヤ人国家イスラエルに向けられています。

こうした言葉の意味を十分に理解しないまま、声を上げている人々もいます。その声が重なり、イスラエルに対するゆがんだイメージが形成され、やがて大きな世論となっていきます。

かつてナチスも、ユダヤ人の絶滅政策を「ユダヤ人問題の最終的解決」と呼びました。恐ろしい「絶滅」を、「解決」という言葉に置き換えたのです。こうした言葉が繰り返されるうちに、人々の心はまひしていきます。その怖さを、私たちは歴史から学ぶことができます。

「悪が勝利するために必要なのは、善良な人々が何もしないことである」という言葉があります。真実が封じられ、憎しみが容認され、善良な人々が沈黙するとき、悪は広がっていきます。神さまのご計画は、みことばの約束どおり、イスラエルを軸に進んでいます。この世の流れにのみ込まれず、主の前に何が正しいのかを見分け、勇気をもって声を上げ続けられるように、祈りましょう。



ナチスは、ユダヤ人絶滅政策を「ユダヤ人問題の最終的解決」と呼び「絶滅」を「解決」という言葉に置き換えた Photo:Public Domain

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。(ミカ6:8) 新改訳第三版

- ①イスラエルが、その存在を否定する勢力から守られ、みことばの約束どおり、神のご計画の中で、与えられた役割を果たすことができるように。
- ②イスラエルを憎み、攻撃する人々の心に神さまが触れ、その心が変わえられるように。
- ③私たちクリスチャンが世の流れにのみ込まれず、何が主の前に正しいのかを見分け、祈り、行動することができるよう。

2. 日本の大学における反ユダヤ主義を覚えて

世界で急拡大する反ユダヤ主義。その影響は、大学にも急速に広がっています。アメリカでは、

大学構内における反ユダヤ主義が社会問題となり、それを容認した名門大学の学長が辞任に追い

込まれました。

これは、遠いアメリカだけの問題ではありません。イスラエルとハマスの戦争が勃発して以降、日本の大学においても、少なくとも十数校でパレスチナ連帯デモが発生。ある国立大学では2024年5月、アメリカの学生運動に触発された学生・教職員約500人が抗議活動に参加し、イスラエルと関係を断つことを大学側に求めました。その大学では、社会正義論の授業で、こう教えられています。「イスラエルは、植民地主義でアパルトヘイト国家。ガザ地区への攻撃は21世紀のホロコーストだ」と。こうした誤った教えが教壇から語られれば、学生たちは真実だと受け取るでしょう。



イスラエルとハマスの戦争が勃発して以降、日本の大学においても少なくとも十数校でパレスチナ連帯デモが発生 Photo:Shutterstock

日本は同調圧力の強い国です。イスラエル支持を表明することに勇気を要する時代となりました。そのような時代にあっても、私たちが神の御心に堅く立ち続けられるよう祈ってまいりましょう。

若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。(箴言22:6)

- ① 大学などの教育現場において、反ユダヤ主義的な教えではなく、正確なイスラエル情報が語られるように。
- ② 日本の若者たちが、時代の空気に流されず、反ユダヤ主義にのみ込まれることがないように。
- ③ 反ユダヤ主義の嵐の中であって、主がイスラエルと共に立つクリスチャンを支え、地の塩、世の光として用いてくださるように。

3. イスラエルの高校生、来日交流プログラム感謝報告

8月、イスラエルの高校生4名が来日し、日本のクリスチャンの高校生6名と、3日間の交流プログラムが行われました。

この交流プログラムは、イスラエルと日本の高校生たちが、知識を超えて実際に関わり、互いを知り、愛し合う関係を築いてほしいという願いから生まれました。3日間の交流を通して互いの理解が深まり、友情が育まれる恵みの時となりました。

イスラエルの高校生からは、「ニュースでは、傷つくような報道や批判を目にすることも多いけれど、今回、日本人が自分たちのために祈ってく

れていることを知り、本当に感動した」との声がありました。また、日本の高校生からも、「これまで遠い存在だったイスラエルが、今回の交流を通して身近になった。これからは、みんなの顔を思い出しながらイスラエルのために祈ることができる」と分かち合ってくれました。

プログラムの最後には、今回生まれた友情が、この3日間だけで終わることなく、将来にわたって共に平和の架け橋を築く者となることを期待して、記念品が渡されました。記念品には、「橋を架ける人」を意味する「Bridge Builder」と書かれています。今後も、イスラエルと日本の若者たちが出会い、関わる機会をつくっていきたいと願っています。

3日間の様子をまとめたダイジェスト映像がご覧いただけます。ご覧ください。



8月 イスラエルの高校生が来日し、日本のクリスチャン高校生との交流プログラムが実現! Photo:B.F.P. Japan

映像はこちら ▶▶▶



<https://youtu.be/SOFCIxxhXWA>



「見よ。なんとという幸せ なんとという楽しさだろう。兄弟たちが一つになって ともに生きることは。(詩篇133:1)」

- ① 参加した高校生たちが、将来にわたって支え合う友となり、これからもその関係が祝福されるように。
- ② これから計画しているさまざまな若者プログラムを通して、イスラエルを愛し、祝福する若いクリスチャンたちがますます起こされていくように。
- ③ これからも多くのイスラエルの高校生を日本に迎え、実際の関わりを通じて、神さまの愛を届けることができるように。